令和2年度卒業論文

「大長編ドラえもん のび太と鉄人兵団」の分析 ~ロボットの表現の分析を通して~

大阪教育大学 教育学部

学校教育教員養成課程 中等教育専攻 国語教育コース

国語表現ゼミナール

174112 吉田浩太朗

指導教員 野浪 正隆先生

令和3年 1月29日 提出

(原稿用紙換算 132 枚)

目次

序章 研究動機 目的

第一章 研究に当たって

第一節 対象について

第二節 あらすじ

第三節 研究方法

第二章 作品分析

第一節 オノマトペについて

第二節 リルルというキャラクターについて

第三章 考察と今後の課題

第一節 考察

第二節 今後の課題

終章 おわりに

序章 研究動機

私の家には幼少期から「ドラえもん」が全巻あった。私は「ドラえもん」が大好きだった。22 世紀から来た猫型ロボットが、ポケットから出てくる不思議で素敵な道具の数々が、時に心に刺さる登場人物のセリフが、私の心をつかんで離さなかった。その中でも好きな話が、今回の研究で扱う「のび太と鉄人兵団」である。そこに登場する様々なロボットに心を奪われた。地球を侵略しに来る恐ろしい鉄人兵団、のび太たちの力強い味方となる巨大なロボットザンダクロス、敵側のスパイとして地球に送り込まれながらのび太たちとのかかわりを通して人の心を知り、最後には自分の命を犠牲によりよい未来を願う判断をするリルルといった非常に魅力的なキャラクターが登場する。

私の心をつかんで離さないこれらのキャラクターがどのような表現で彩られているのか、他のキャラクターとはどの様な違いを持って描かれているのかということを明らかにしたいと思い、今回の研究をするに至った。

第一章 研究に当たって

第一節 対象について

研究に当たって用いるのは、「大長編ドラえもんのび太と鉄人兵団」である。本作は作者が自分のライフワークであると称する「ドラえもん」の大長編シリーズの第7作目である。本作品は「大長編ドラえもんシリーズ」の中で初めてタイトルが「のび太の〜」から「のび太と〜」に変化した作品であるとともに、二度映画化されている作品でもあり、数多くある作品の中でも作者の思い入れがあり、人々からも強い人気を得ている作品であるといえる。本作品はもともと「ドラえもん」というロボットを扱った作品の中でもより人間とロボットの関係について描かれた作品である。人間を奴隷にするために地球に攻め込んでくる鉄人兵団相手にのび太たちが立ち向かい、その戦いの中で友情や、勇気や、ロボットと人間側の間で揺れ動く心情などが鮮明に表現されている。今回の研究では、本作品におけるロボットの描かれ方について、どういった部分がキャラクターを魅力的に映しているのかといったところについて研究していく。

第二節 あらすじ

本作品は、スネ夫が自作したロボットをのび太に自慢して、のび太がドラえもんにロボットをねだるところから始まる。ドラえもんは夏の暑さとのび太の無茶なお願いにいらだち、北極に涼みに行く。のび太はドラえもんを追いかけ北極に向かい、そこで巨大なロボットの部品を送り出す機械を発見する。のび太たちはその部品を組み立てて完成させた巨大なロボットにザンダクロスと名前を付け、そのロボットを用いて遊びに興じる。

しかしとある機会にその巨大ロボットが恐ろしい兵器としての機能を持ち合わせたものであるということを知り、ドラえもんのひみつ道具を用いて鏡の中の世界に放置することとなる。それから数日が経ち、巨大なロボットを探す謎の少女リルルがあらわれる。巨大なロボットの元の持ち主であると名乗るリルルにのび太はザンダクロスを返す。

ザンダクロスをリルルに返したのび太たちであるが、巨大ロボットを用いて何を行おうとしているのかを不審

に思いリルルの動向を探ることになる。そこでのび太たちはロボットの軍隊、鉄人兵団が地球に攻め込み 人間を奴隷にしようと計画していることを知る。のび太たちはドラえもんの道具で作り出した鏡の世界で鉄 人兵団を迎え撃つが、その圧倒的な数に押され、地球は侵略される寸前まで追い込まれる。

その時、のび太たちとのかかわりを通して人の心を学んだリルルの自分の命を犠牲にした過去を改変するという行動によって地球から鉄人兵団が消滅する。その後のび太たちはリルルのことを忘れられずに平穏な日々を過ごすことになる。

そして最後の場面で、「今度は侵略のためではなく、観光などでリルルに地球に来てほしい」と願うのび 太の前に生まれ変わったリルルが姿を見せ、空き地にいるドラえもんたちに伝えに行く場面で物語は終了 する。

第三節 研究方法

今回の研究では、「のび太と鉄人兵団」におけるロボットの描き方についてそれぞれのキャラクターが描かれる場面の画像の分析を行うことで研究していく。そのために、オノマトペやキャラクターごとの描かれ方の違いについて注目していく。オノマトペについてはロボットの出すオノマトペと人間のキャラクターの出すオノマトペでは違いはあるのか、あるとすればどのような違いがあるのかといった調査を行う。

キャラクターごとの描かれ方の違いにおいては、オノマトペ以外の部分で人間とロボットの違いがどのようなところにあるのか、ロボットによって描かれ方に違いが出てくるのかといったところの分析を行う。ここでは主にその言動、登場する際の演出に注目していく。

第二章 作品分析

第一節 オノマトペについて

漫画における音や速さなど、絵のみではわからない、もしくはわかりづらいものを表現する手法として、オノマトペを用いるというものがある。重いものが落ちるときに「ズシン」という文字を絵の横に描くといったところである。

ここで、本作品におけるオノマトペを登場人物ごとに分類し、違いがあるのかということについて調べていく。次の表が結果をまとめたものになる。

人物	人物の行動につけられたオノマトペ
のび太	①ブルッ ②ガク ③ググッ ④ポヤ~ ⑤ギュ… ⑥ソロ…ソロリ ⑦ピョコ
しずか	①ギュ··· ②ソロ··· ③ドタ
スネ夫	①ソワソワ ②ウロウロ
ドラえもん	①バタン ②コテン ③ガサガサ ④ドタドタ ⑤カッ
ミクロス	①ズシ ②ピ、ピッ ③ブルーン ④ガツン ⑤ガチョン ⑥ズル ⑦カチャ ⑧
	ギ、ガギ… ⑨パチパチ
ザンダクロス	①ズシ ②ガク ③クル ④ボ! ⑤ゴ、ゴ、ゴ ⑥ザバ ⑦ザンブ ⑧クルクル
	⑨ガ、ガ、ガ、ガ… ⑩ジャキン ⑪チュン ⑫グイ
	③ギ、 ⑭ドスッ
リルル	①ヒラリ ②バッ ③フワ ④グッ ⑤ガバ ⑥バタ
鉄人兵団	①カシャ ②ガシャシャ ③ギロ ④クル ⑤ガチャ ⑥ギシ
	⑦ゴオ ⑧ゴオン ⑨ジャッ ⑩ドッ
敵司令	①ドン ②ゴオ

以上が本作品に登場するキャラクターの行動につけられたオノマトペの一覧である。文字だけではどのようなオノマトペかわからないため、それぞれどのような場面で用いられたか説明していく。

・のび太 ①南極の寒さに震える場面 ②ショックで落ち込む場面 ③ロボットの操縦でレバーを押し込む場面 ④会話に身が入らずぼんやりしている場面 ⑤しずかと抱き合う場面 ⑥鉄人兵団から隠れて歩く場面 ⑦ドラえもんの大声で目を覚ます場面

- ・しずか ①のび太と抱き合う場面 ②包帯をゆっくりとはがす場面 ③押し倒される場面
- ・スネ夫 ①、②どちらも迫る鉄人兵団を待ち焦る場面

・ドラえもん ①どこでもドアを力強〈閉じる場面 ②疲れて倒れる場面 ③茂みの中で動〈場面 ④敵を急いで追いかける場面 ⑤名案を思いつき目を見開〈場面

・ミクロス ①歩いて登場する場面 ②ミサイルを飛ばす場面 ③プロペラで空を飛ぶ場面 ④のび太

にぶつかる場面 ⑤ジャイアンをけ飛ばす場面 ⑥拍子抜けしてこける場面 ⑦恐怖に震えて体から音が鳴る場面 ⑧肉をのどに詰まらせる場面 ⑨考えすぎてショートする場面

・ザンダクロス ①動く場面全般 ②のび太が操縦する際に操縦者ののび太が落ち込み、それに連動して動く場面 ③のび太の操縦で方向転換する場面 ④足のジェットに点火する場面 ⑤着陸時にジェットを噴出する場面 ⑥⑦ともにのび太の操縦で泳ぐ場面

⑧のび太の操縦で前転宙返りする場面 ⑨しずかがボタンを押したことで兵器が起動する場面、敵に操られ動き出す場面 ⑩ロボットの体から兵器が出てくる場面 ⑪ビームを打ち出す場面 ⑫異空間への入り口を広げようと無理やり腕を穴に入れ動かす場面 ⑬ドラえもんの取り付けた人工知能によりぎこちなく動き出す場面 ⑭敵の出現に対して速い速度で動く場面

・リルル ①白熊の突進をかわす場面 ②指からビームを打ち出す場面 ③空を飛ぶ場面 ④しずかの足をつかむ場面 ⑤ベッドで体を起こす場面 ⑥カ尽きて倒れる場面 ⑦ロから薬を吐き出す場面

・鉄人兵団 ①鳥型のロボットが歩く場面 ②鳥型のロボットが走って迫って〈る場面

③鳥型のロボットが物音に振り返る場面 ④鳥型のロボットが振り返る場面 ⑤鳥型のロボットが窓ガラスを割る場面、走る場面 ⑥鳥型のロボットが敵を認識してぎこちなく動き出す場面 ⑦飛行型のロボットが空を飛ぶ場面 ⑧飛行型のロボットが集団で空を飛ぶ場面 ⑨飛行型のロボットが指からビームを出す場面 ⑩鉄人兵団が足並みをそろえて行進する場面

・司令官 ①人間がいないことに腹を立て地団駄を踏む場面 ②空を飛ぶ場面

これらが主な登場人物の行動により発生したオノマトペとその場面の一覧である。次に、人間とロボットの表現の違いについて比べていくために、これらの登場人物を3つのグループにジャンル分けする。

- ①完全な人間として描かれるキャラクター
- ②完全なロボットとして描かれるキャラクター
- ③中間に位置するキャラクター

この3つのグループに分類し、これらのグループにそれぞれ以下のような選出基準を設けてキャラクターを分類していく。

①のび太やしずかのような見た目も中身も人間として扱われているキャラクター。表情やセリフにも感情があらわれており、行動する際にもその動きから心情を読み取る音が可能となっている。

②ザンダクロスなどの自ら考えての行動をしない、他者に作られた存在として描かれるキャラクター。与えられた命令、操縦通りに動く。

③ロボットでありながら、自分で何かを感じたり、考えたりして行動するキャラクター。

先ほどの表のキャラクターをこれらの基準に従ってそれぞれ分類していく。

- ①のび太、しずか、スネ夫
- ②ザンダクロス、ほとんどの鉄人兵団
- ③ドラえもん、リルル、ミクロス、一部の鉄人兵団

このように登場人物を分類する。どちらも人間側として描かれるロボットで在るザンダクロスとミクロスを 別々のグループにしたのはその思考の在り方に違いがあったからである。ザンダクロスとミクロスはどちらも 途中で人工知能を与えられて他者の操縦を必要とせずに動くようになる。

しかし、ザンダクロスの人工知能はもともとあった人工知能をドラえもんが自分たちの都合のいいように 改造したものであり、ドラえもんやミクロスのように自分で善悪の判断やどういった行動をするかを完全に自 分で行っているとは言えない。そのため、ドラえもんと同様に自ら考え意志を持って行動するキャラクターで あるミクロスを③に、ザンダクロスを②に分類した。

ここからは、それぞれのグループから一人ずつキャラクターを選出して、そのオノマトペについて調べていく。キャラクターはそれぞれ「のび太」「ザンダクロス」「リルル」とする。人間側として描かれるのび太と、ロボット側としても人間側としても描かれる二人のキャラクターの描かれ方の違いについて調べていく。

のび太のオノマトペ



画像①(のび太と鉄人兵団 p.9)

画像①では、のび太が寒さに震える際にオノマトペが用いられている。フォントは丸みを帯びたものになっており、ただ寒さに震える辛さを描くだけでなく、半そでで北極に来ているのび太の少しドジな様子が読み取れる部分となっている。



画像②(のび太と鉄人兵団 p. 18)

画像②は、期待していた考えがうまくいかないことがわかり落ち込むのび太の落胆を表現する際にオノマトペが用いられている。フォントは角ばっており、中の色が通常の黒塗りではなく、のび太の頭から出ている渦巻のようなぐしゃぐしゃとした線の模様を用いて着色されていることがわかる。このぐしゃぐしゃとした線は、思考の行き先がない、またはどうしようもできない悔しさ、やるせなさといったイメージを読み取ることができ、それをオノマトペのフォントにも用いることで「ガク」というオノマトペの持つ落胆のイメージにその効果が加えられているといえる。



■画像③(のび太と鉄人兵団 p. 27)

画像③では、のび太がザンダクロスを操縦しようと意気込んでレバーを押す場面でオノマトペが用いられている。ここでも画像①と同様に丸みを帯びたフォントが用いられており、ただレバーが動く際の音というわけではなく、そこから操縦しているのび太の存在を思わせるものとなっている。また、ここで「グッ」ではなく「ググッ」という音を用いることで、のび太のロボットを操縦してやるという意気込みが読み取れる表現となっている。この前のコマで、のび太はドラえもんに操縦の方法もわからないままザンダクロスを動かすことを促され、ちょっとした怒りを抱いている。このコマでは、そんなドラえもんに対して操縦して見返してやるという心情を、表情を映さず手だけを映したコマでオノマトペを用いて表現しているといえる。



画像④(のび太と鉄人兵団 p. 72)

画像④は、リルルと秘密を共有してそのことに気を取られて上の空になっているのび太を描いた場面である。フォントは、通常の色とは異なり白塗りになっており、最後の伸ばし棒は通常のものではなく「~」が用いられている。まず色が黒ではなく白を用いていることから緊張感のなさを読み取ることができる。そして「~」を用いることで、通常よりも間延びした様子を描いているといえる。また、フォントの形も線が終わりに行くにつれ細くなっており、最後が弱弱しく終わっていることからのび太の何事も最後まで考え切らない、物事に集中できない心情が読み取ることができる。



■●画像⑤(のび太と鉄人兵団 p. 124)

画像⑤は、鉄人兵団に襲われてしずかを助けたのび太が二人で抱き合う場面でオノマトペが用いられている。フォントは白文字にハートの模様を描いたものになっている。「ギュ」ではなく「ギュ・・・」になっていることで抱き合いながらものび太がしずかと抱き合う力の弱さが読み取れる。文字の形も角ばったものになっており、抱き合う際のぎこちなさを表現しているといえる。また、ハートの模様が文字の中に描かれることで、赤面しているのび太の照れくささや、ちょっとした恋愛感情を表現できていることからも、オノマトペを用いてかなり直接的に登場人物の心情を描写している部分であるということができる。



● ぞかみださ ● 画像⑥(のび太と鉄人兵団 p. 81)

画像⑥は、隠れているのび太が物音を聞いてその場から離れようとする場面でオノマトペが用いられている。フォントは他に用いられている場面と比較してかなり細く、大きさもかなり小さいものになっている。このフォントからはのび太が立てている物音の小ささを読み取ることができる。見えない誰かの姿におびえ、物音を立てずに逃げようとするのび太の怯え、恐怖を読み取ることのできる部分となっている。直接心情を描写する部分ではないが、物音を立てないように歩いている、という状況からのび太の恐怖や緊張感をオノマトペによって描写しているといえる。



画像⑦(のび太と鉄人兵団 p. 145)

画像では、眠っていたのび太がドラえもんの声で目覚める場面でオノマトペが用いられている。フォントは 角ばったものになっており、黒〈塗られたものであるためそこから直接的にのび太の心情を読み取ることはで きない。「ピョコ」というオノマトペは自然に目覚めるときのオノマトペとしては基本的に使われない。ここでは、 自らの意志ではなくドラえもんの大声によって目を覚ましたのび太の反射的に体を起こす様子を普段その 行動に対して用いられないオノマトペを用いることで表現しているといえる。 ここまでのび太の行動に対してオノマトペが用いられていた 7 つの場面の分析を行ってきた。ここで注目したいのは、オノマトペがその言葉の持つ本来の意味以上の効果を発揮していたということである。主にフォントの形の変化、色の違い、模様を用いることでそれを読み取る読者により多くの情報を読み取らせることが可能になるように描かれていた。

のび太のオノマトペを分析して共通して言えることは、その行動の裏側にある登場人物の心情を読み取ることが可能になっていたということである。例外として、画像⑦の場面ではオノマトペで心情を表現することがなくのび太の反射的な動きをコミカルに表現するものとなっていたが、人間であるのび太の行動につけられたオノマトペからは基本的にのび太の心情が読み取れるものとなっていた。

そこで、この後は完全なロボットで在るザンダクロスと中間の存在として描かれるリルルのオノマトペについて分析を行っていく。

ザンダクロスのオノマトペ

ザンダクロスの行動は、4 種類に分類することができる。まず1つ目がのび太やしずかが操縦する場合、2つ目がリルルが操縦する場合、3つ目が人工知能で動く場合、4つ目が命令を受けて兵器、ロボットとして動く場合である。ザンダクロスはキャラクター分類の 2 個目のグループに分類される、他者の命令や操作を受けて行動するキャラクターであるため、操縦者の考える動きがそのまま行動に現れる。そのためその行動につくオノマトペにも変化があらわれる。ザンダクロスのオノマトペの分析の際はこの 4 つの観点から分析を行い、他のキャラクターのオノマトペとの比較を行っていく。

のび太が操縦する場面



画像①(のび太と鉄人兵団 p. 32)

画像①は、のび太がザンダクロスを操縦して町を歩く場面である。上のコマと下のコマで5つの「ズシ」というオノマトペが存在するが、それぞれ異なるフォントをしている。まずは上のコマの分析を行う。上のコマはゆっくりザンダクロスを歩かせている場面である。2つある「ズシ」のフォントはどちらも角ばったものになっており、「...」がつくことでゆっくり歩いているザンダクロスの音が誰もいない町に響く様子を表現している。黒塗りのフォントのほうの「ズシ」はその文字の太さからも力強さを感じられるオノマトペとなっている。2つ目の斑点のあるオノマトペは、ザンダクロスの動きによって巻き上げられる石ころをイメージしたものであると考えられる。そこまで強い衝撃ではないが歩くことにより強い力が発生していることを表現し、ザンダクロスの迫力を

演出している工夫であるといえる。

次に下のコマのオノマトペの分析に移る。下のコマは先ほどの上のコマよりも歩くスピードを上げたザンダクロスを描いたコマである。「...」もなくなり、オノマトペの数も1つ増えて3つになっていることから、歩く間隔が短くなりスピードが上がったことを演出しているといえる。最も左のオノマトペは、黒塗りのフォントであり先ほどよりも大きく太い文字になっている。上のコマよりも音の発生源である足に視点が近づいていることから音が大きく聞こえており、その力強さを表現しているといえる。

次に真ん中のオノマトペを分析する。真ん中のオノマトペは線の始まりが膨らんでおり終わりに行くにつれて細くなっていくというフォントになっている。文字の中は網目のような模様になっており、力強さよりもスピード感を演出するフォントとなっている。文字が太い部分から次第に細くなっていくフォントは、大きい物体であるザンダクロスが風を切りながら進んでいくという状況を表現したものであるといえる。

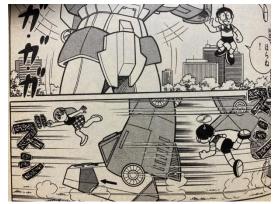
右側のオノマトペは、白と黒のグラデーションのフォントになっている。「ズ」の最初の線が太くなっており、他の線は細くなっている。ここからは、ザンダクロスが力強く地面を踏み込む様子、その後すぐに足が地面から離れて進んでいくという流れを色合いと文字の形で表現しているということが考えられる。力強さを表現する黒い色と軽い印象を与える白い色を同時に描き、線の太い部分と細い部分を同じ文字に存在させることによって、ザンダクロスの力強さを演出しながらもスピード感も同時に描いているといえる。



画像②(p. 29)

画像②は、ザンダクロスを自分が操縦していると思い喜んでいたのび太が、ドラえもんが操縦していたということを知ってザンダクロスの中で落ち込む場面である。ドラえもんの持つ装置によって、ザンダクロスは操縦者の思いのままに動くようになっており、操縦者の感情がそのまま行動に反映されるようになっている。「ガク」というオノマトペは基本的に落胆したときに用いられるものである。ザンダクロスは本来感情を持たないロボットであるため、このコマの「ガク」というオノマトペはザンダクロスの行動につけられたオノマトペの中で直接的に感情を読み取れる珍しい場面である。

リルルが操縦する場面



画像③(のび太と鉄人兵団 p. 69)

画像③は、のび太がザンダクロスを思い通りに動かすことのできる機械をリルルに渡し、リルルがその効果を確かめる場面である。上のコマは、黒塗りで線の終わりが細くなっていくフォントになっている。「ガ.ガ.ガ」というオノマトペからはぎこちない動きであるという印象と機械の動きの力強さを読み取ることができる。のび太の操縦の場面の際にはなかったそこまで強調されていなかった部分であり、ここに「のび太が人間の思考、人間の動きで操縦するザンダクロス」と「リルルが機械を動かすという認識で操縦するザンダクロス」の違いが出ているといえる。

下のコマでは、リルルの操縦によりかなりスピードが出ていると思われるザンダクロスの様子が描かれている。「ズシ」のオノマトペはひび割れたような模様で、太〈大き〈角ばった字体のフォントになっている。オノマトペの周りには揺れを表現するような線が描かれており、のび太が操縦していた時の「ズシ」のオノマトペと比較してその力強さがかなり上回っていることが読み取れる。リルルの操縦によりザンダクロスという存在の「巨大なロボット」という側面が前面に押し出された表現であるといえる。

人工知能により動く場面



■ 画像④(のび太と鉄人兵団 p. 110)

画像④は、ザンダクロスに改造した人工知能を埋め込み、自分たちの味方になるような行動をしてくれるかを確認する場面である。「ガ.ガ…」というオノマトペが用いられており、少し丸みを帯びた小さい白黒のグラデーションのフォントになっている。リルルが初めてザンダクロスを操縦した際にも同様のオノマトペが用

いられていたが、それに比べて少し機械らしさがなくなったオノマトペになっているといえる。オノマトペ自体は機械らしさを押し出したものであり、のび太たちも動きに対して自分たちの味方なのか疑問に感じていることからぎこちなく機械じみた動作をしていることがわかる。白黒のグラデーションは、この機械らしさとのび太たちの見方で在ろうとする人工知能の両方を表現したものであるということが考えられる。



■画像⑤(のび太と鉄人兵団 p. 124)

画像⑤は、ザンダクロスがのび太たちの味方であるということが判明した後に行動を共にする場面である。黒塗りで丸みを帯びた「ズシ」というフォントが用いられている。巨大なロボットであるため、その行動にはカ強さを感じさせるオノマトペが用いられているが、機械らしさに関しては他の場面と比較して明らかに少ない場面になっていることがわかる。この場面では左足が上がっているが、他の場面ではここまで上がってはおらず、足元にいるのび太たちを気遣っていると考えられる。丸みを帯びたオノマトペの効果もあり、この場面ではザンダクロスが「のび太たちの味方になった巨大ロボット」として描かれているといえる。

命令を受けて兵器、ロボットとして動く場面



画像⑥(のび太と鉄人兵団 p. 46)

画像⑥は、ザンダクロスの操縦席にあるボタンをしずかが押したことでザンダクロスが兵器として動き 出す場面である。「ガ.ガ.ガ. Jというオノマトペが用いられており、上のコマでは黒塗りで角ばった大きい フォントが用いられている。次のコマでは斑点のような模様の付いた角ばった大きいフォントが用いられて おり、どちらのコマもザンダクロスが兵器として行動するまでの準備の音を描いていると考えられる。リルル が操縦した場面、人工知能によって行動する場面でも同じオノマトペが用いられる場面はあったが、どち らとも異なるフォントで描かれており、どちらの場面のオノマトペよりも無機質で力強い印象を受ける表現に なっている。斑点の付いたオノマトペは、のび太たちが操縦席の中から聞く音とは異なり、兵器を撃ちだす 準備を進めていって音が変化していく状況であると考えることができる。困惑するのび太たちに関わらず、 着々と兵器を撃ちだす準備を進めている無機質なロボットとしての演出であるといえる。

この後のコマでは、「ジャキン」というオノマトペが用いられている。上記の 2 コマと同じ、角ばった大きいフォントが用いられており、文字は濃く塗られている。発生している音としては上 2 コマよりも小さいものであると考えられるが、その大きさはそれらよりも大きく描かれており、コマもはみ出している。このことから、大きな音を立てて出現した小さな兵器が危険な存在であることを表現しているといえる。

以上が、ザンダクロスの行動につけられたオノマトペを 4 つに分類したうえでそれぞれの場面を分析したものである。どのオノマトペも、当然ながら前提としてザンダクロスが巨大なロボットである、ということが設定されているものとなっていることがわかった。ほとんどのオノマトペは「ズシ」や「ガガガ」などの実際に生じている音を描いたものであった。例外として描かれていたのはのび太が操縦していた際につけられていた「クル」など人間の操縦による行動に対するものであった。

それぞれに共通した特徴として、人間の行動につけられたオノマトペとは異なり、オノマトペから心情が 読み取れるものはないという点と、実際の音を表す擬音語がほとんどであるという点が挙げられる。ザンダ クロス自身は 4 つに分類したどの状態においても、感情を持つことはない。これはザンダクロスのキャラク ター性を際立たせるためであると考えられる。

例えば、ドラえもんはロボットで在りながら感情を持つキャラクターである。そのため誰かの言葉や行動、 出来事によって感情が変化し、人間と同じような描き方がなされている。表情が変わり、漫画的記号を用いてその感情が表現されることもある。

ザンダクロスはそういった描き方はされておらず、完全に感情を持たないロボットとして描かれている。ザンダクロスは本作品において、「巨大で感情を持たない兵器」として存在するために上記のような工夫を用いてオノマトペによって彩られているといえる。

リルルのオノマトペ

最後にリルルのオノマトペの分析に移る。リルルは鉄人兵団から偵察のために地球に送り出されたロボットであり、その姿は完全に人間の姿をしている。本作品のロボットの中で唯一人間の見た目で描かれるキャラクターであり、ロボットと人間の中間として描かれる存在の中でもより人間に近い描かれ方をしているといえる。また、リルルは当初は鉄人兵団側として行動するが、途中からは人間側の心を知りその行動を変化させるキャラクターである。その描かれる時期でもオノマトペに違いはあるのかについて分析を行う。



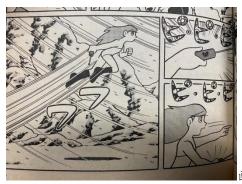
画像①(のび太と鉄人兵団 p. 40)

画像①は、北極に通常では考えられない服装で現れたリルルがホッキョクグマに襲われる場面である。この時点では読者はリルルがどんなキャラクターであるかは分かっておらず、謎の少女として描かれている。黒塗りの通常の字体で「ヒラリ」というオノマトペが用いられている。とくにオノマトペに手はくわえられておらず、こともなげにホッキョクグマの突進をかわしている様子が表現されている。この前の場面でドラえもんがホッキョクグマに襲われて逃げる、という場面が描かれているため、脅威であるホッキョクグマを軽くあしらう様子の異常性が際立つ表現となっている。



画像②(のび太と鉄人兵団 p. 41)

画像②では、リルルがホッキョクグマに対して指からビームを撃つ場面でオノマトペが用いられている。 線の先がギザギザになった荒々しい字体をしており、大きいフォントになっている。また、字の中の模様は 歯車になっており、直接的に機械のイメージを与える部分になっているといえる。その字体からもリルルが 指から出したビームの威力が高いことがわかり、特に苦労した様子もなくホッキョクグマを倒してしまえるほど のビームを撃ちだすリルルの異常さを際立たせる表現であり、歯車の模様でその正体や兵器らしさを表現 していると考えられる。



■画像③(のび太と鉄人兵団 p. 41)

画像③は、リルルが移動する際に空を飛ぶ場面である。白塗りで少し丸いフォントとなっている。白塗りにすることで力のなさ、浮遊感を表現しており空を飛ぶことに力を入れているわけではなく自然と飛んでいることが読み取れる。もちろん人間が空を飛ぶことはできないので、自然に空を飛んでいることを強調することで画像②と同様にリルルの異常性を際立たせる部分となっているといえる。



■● 画像④(のび太と鉄人兵団 p. 113)

画像④は、傷ついたリルルがしずかちゃんの足をつかむ場面である。黒い色で鋭い字体のフォントが 用いられている。傷ついた状態にもかかわらずしずかちゃんを捕まえようとする際の素早さや力強さが感じ 取れるようになっており、リルルの執念を表現する1つのポイントになっているといえる。このオノマトペ自体か ら心情が読み取れるわけではないが、絵と組み合わせることでこの行動の原因となっている執念を描い ている。



たよ画像⑤(のび太と鉄人兵団 p. 130)

画像⑤はリルルがけがをして気絶した後に目を覚ます場面である。角ばった少し色のついたフォントとなっている。体を起こす際の音として「ガバ」を用いることで通常に起きる場合よりも勢いよく起きる様子を表現しており、使命をもって送られたリルルの鉄人兵団の兵士としての一面が読み取れる部分となっている。けがをしている状態にもかかわらず勢いよく起きようとしていることから、鉄人兵団の誘導という命令を与えられている自分が気絶して活動できていなかったという事実に対しての焦りを感じていると考えることができる。



■画像⑥(のび太と鉄人兵団 p.)

画像⑥は、けがをしているリルルが無理をして動き倒れる場面である。大きい字体で、文字の中が黒くひび割れたフォントになっている。かなり強い音で床に倒れていることがわかり、受け身も取らずに倒れるほど弱っているリルルの様子を強調する表現となっている。ここでも、画像⑤の場面と同様に直接心情を読み取れるわけではないが、ぼろぼろの状態でありながら動き大きい音を出して倒れるという行動から、その行動をさせるに至った強い感情(この場面においてはしずかへの怒り)を読み取ることができる部分になっているといえる。

以上がリルルの行動につけられたオノマトペである。登場する場面である画像①~画像③の場面においては、リルルは「空を飛び、手からビームを出し、北極で薄着で歩く謎の少女」として描かれている。 そのためその場面で用いられているオノマトペは人間が行動する際には用いられないようなものになっており、非人間性を表現しているといえる。

その後の画像④~画像⑥では登場人物の分類①に分類したのび太たちと同様に、人間の行動に対して用いられるオノマトペが用いられている。この理由として考えられるのが、リルルが上記の「謎の少女」から「しずかやのび太とかかわり、話すことのできるロボット」という存在に変化したからというものである。リルルという存在が人間に近づいていくにつれて、そのオノマトペも人間に近いものに変化して言っているということが言える。

まとめ

ここまでで「完全な人間」「完全なロボット」「人間とロボットの中間」と分類したキャラクターのオノマトペの分析を行った。それぞれ「のび太」「ザンダクロス」「リルル」のオノマトペを取り上げたが、のび太は擬容語と擬情語、ザンダクロスは擬音語と1つの例外のみ擬情語、リルルは擬音語と擬容語となっていた。

これにより作者が明らかに登場人物を「感情を持つ者」、「兵器、機械」、「人間と同様の行動をする機械」というふうに分けていることがわかった。オノマトペにもキャラクターの特徴が表れており、それだけを見てものび太は「臆病でぼんやりとした人物」、ザンダクロスは「大きくて強い機械」、リルルは「どこか人間離れした人物」であると読み取ることができる。漫画では小説とは異なり、文字による人物の説明ができないため、絵による説明に加えて、オノマトペによってそのキャラクターの補強を行っているといえる。

この補強されるキャラクター性として、ザンダクロスという存在を見てみると、その根幹にロボットという存在の「機械、兵器、感情を持たない」という面が挙げられる。オノマトペに 1 つを除いて擬音語だけを用いられていることからも、自立思考していてもあくまでも生物ではなく機械であるということを前提としていることがわかる。

鉄人兵団側のキャラクターであるロボットの兵士や鉄人兵団側から人間側のキャラクターになるザンダクロスといった存在はそのオノマトペからも読み取れるように「機械」という性質を前提として描かれている。オノマトペの効果も行動によって発生する音の強弱やスピード感などを修飾するものとして用いられており、あくまでも実際に発生している音を説明したものとなっている。

ここでリルルというキャラクターの異質さが明らかになる。鉄人兵団側でありながら人間との触れ合いを通して人間の心を学ぶリルルは、登場場面こそ「謎の少女」であることを演出するオノマトペが用いられているが、それ以降人間のキャラクターとかかわるにつれてそのオノマトペも人間と同様のものが用いられるようになっていく。ここからは同じ立場のロボットであるにもかかわらず他の鉄人兵団と描きわけがなされているキャラクターであるリルルについての分析を通してロボットの描き方を考察していく。

第二節 リルルというキャラクターについて

リルルは、鉄人兵団という人間を奴隷にしようと計画する軍団の中でスパイとして人間の見た目で地球

に送り込まれたキャラクターである。鉄人兵団の中で人間の見た目をしているのはリルルだけであり、他のキャラクターは明らかにロボットであるとわかる見た目をしており、ドラえもんとは異なりその表情が変化することもない。このようにリルルはその外見だけでも鉄人兵団の中で特別な存在として描かれている。また、前述したオノマトペの分析からもわかるように、その言動から感情を読み取ることができるのも鉄人兵団の中ではリルルと総司令のみとなっており、他のロボットと明確に異なる点である。ここからはまず感情を持たないロボットがどのように描かれているかを分析していく。

鉄人兵団の中で終始感情を持たないロボットとして描かれているのは鳥型の戦闘ロボットである。鳥型の戦闘ロボットは、鉄人兵団が地球に送った先遣部隊の一員として描かれるロボットである。鉄人兵団がのび太たちを捕獲する際や、町にいる人間を探し出す際に用いられる。鉄人兵団の本隊として描かれるロボットと異なる点は、言葉を発せずにただ任務に忠実に従う存在であるということである。リルルや鉄人兵団の総司令官のように自ら考え行動するわけではなく、そういったキャラクターの命令を中心とした行動を行う。これをふまえて、鳥型の戦闘ロボットが登場する場面の分析を行っていく。

鳥型の戦闘ロボットの分析



画像①(のび太と鉄人兵団 p. 87)

画像①は、鉄人兵団の計画の危険性を知ったのび太たちがリルルに見つかり逃げ出そうとする場面である。鳥型の戦闘ロボットはこの場面で初登場であるが、その形状からものび太たちにとって危険であるということが読み取れる。初登場であるにもかかわらず、その登場を彩る集中線やオノマトペのようなものは存在せず、ただ暗い森の中にたたずむ様子だけが描かれており、機械としての無機質感、兵器らしさを演出しているといえる。

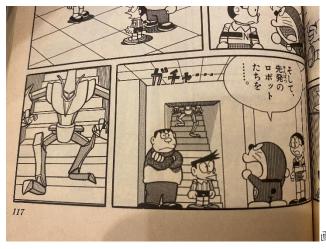
ここで登場するロボットの恐怖感を強調する工夫として、のび太たちが視認するまでその存在を認識していないことが挙げられる。のび太たちはドラえもんが出した筒状のひみつ道具から聞こえてくるリルルの声に

注意を向けており、逃げ出す際にもそちらの方向を向いている。そこでのび太たちが進行方向に目を向け、ロボットを視認することで初めてその姿が描かれる。他の登場人物が描かれるのは、作中の登場人物が認識してから、またはそれと同時であるため、画像①の場面のように何の前触れもなく、唐突に敵が出現することでのび太にとっても読者にとっても予想外の敵の出現になっているといえる。その後、激しく音を立ててのび太たちを追いかけるロボットの様子が描かれており、安全な状況下にいたのび太たちが一転して危険な状況におかれることで緊迫感を描いている。機械の無機質さという特性を活かした工夫が画像①の場面では用いられている。



画像②(のび太と鉄人兵団 p. 105)

画像②は、町を徘徊する鳥型のロボットの足音を聞いたドラえもんたちが慌てて身を隠す場面である。この場面では画像①の場面とは異なり、ドラえもんが鳥型のロボットの足音を認識しておりその後に姿が映し出される。そのため、鳥型の戦闘ロボットの出現は登場人物にとっても読者にとっても予想通りのものになっており、画像①の場面のような恐怖感は無いといえる。この場面では突然目の前に脅威が出現することではなく、町の中を何事もなく脅威が歩いているという異常な状況を描くことでその非日常性を演出している。画像①のように突然恐怖が迫ってくるという場面ではないものの、自分たちの身近にまで鉄人兵団が侵略していることを描いた部分になっている。また、ミクロスが発生させた音を聞きつけて近づいてくる場面を描くことで、油断できないという緊迫感、そして些細な物音も聞き逃さない機械の徹底ぶりを読み取ることができるようになっており、「機械の軍隊が町を徘徊している」という状況や、戦闘型ロボットの実態を描くことでその脅威を具体的に描いた部分となっている。



画像③(のび太と鉄人兵団 p. 117)

画像③はのび太たちが無人のロボット基地の地下で作戦会議を行ってる際に鳥型の戦闘ロボットがやってくる場面である。この場面においても、このロボットは画像①の場面と同様に唐突に場面を転換させる役割を持って描かれている。画像③以前にのび太たちがいる空間はロボットがいない場所として説明されており、鉄人兵団への対抗策を伝える場面で何の前触れもなく鳥型の戦闘ロボットが登場する。

階段の上から登場するロボットは、暗がりに隠れておりドラえもんからしか見えない角度で登場する。この作戦会議の場面において「ガチャ・・・」というオノマトペとロボットの下半身だけが異質なものとして描かれており、鉄人兵団のいない基地での作戦会議という空間を壊す要因なっている。

しかし、場面の転換の要因となる存在であるにもかかわらず、このロボットの登場はその全貌をアップで映しただけであり、画像①の右下のコマと同様に静かな登場である。画像②の左下のコマの戦闘態勢の準備のような腕を前に突き出しながら歩く体勢をしている。全貌が明らかになる前後でその体勢は変わらず、のび太たちにとっては緊迫した状況であっても、ロボットにとっては関係なく、ただプログラミングされた行動をする、という機械の無機質さが表現されているといえる。この人間側ののび太たちの状況に関係なく行動するという描かれ方が読者にとって違和感や不気味さを感じる部分であり、機械を敵として描く際の工夫であると考えられる。



画像④(のび太と鉄人兵団 p. 122,123)

画像④は、傷ついたリルルを治療しようとするしずかの家に鳥型の戦闘ロボットが登場する場面である。右のページでは、この場面よりも前にリルルに敵として襲われているにもかかわらずその傷を治療しようとするしずかのやさしさが描かれている場面である。リルルがロボットであると認識しているにもかかわらず人間と同じように扱っており、人間側の存在であるしずかが中間の存在であるリルルに歩み寄ろうとしていることがわかる。右のページの左下のコマでは、自分の家の 1 階から音が鳴り様子をうかがいに行くしずかの様子が描かれている。しずかはこの時点では来客であると思っており、その対応に行く、という日常生活内で十分あり得る行動を行っている。

ここで、次のページに移る際に破壊されたガラスと鳥型の戦闘ロボットを映すことで、先ほどまでの日常が唐突に壊されたことを演出している。コミュニケーションをとることが可能であったリルルとは異なり、日常を破壊する異質な存在として描かれる鳥型の戦闘ロボットは、ロボット側に歩み寄ろうとしていたしずかに対しても何らその対応を変化させることなく「敵」として描かれていることがわかる。家の中という日常のイメージを強く持つ空間の境界となっている扉を破壊して侵入してくる鳥型の戦闘ロボットは、非日常の象徴ともいえる存在であり、ページをまたぐことで日常から非日常へと展開が急激に変化したことを1コマで表現している。

その後のコマにおいても、機械の特徴を用いて描き方がなされている。両腕をだらんと下げた体勢で待機していた鳥型の戦闘ロボットが「ギシ・・・」というオノマトペとともに動き出す場面はしずかを視認した鳥型の戦闘ロボットが「人間を探す」という行動目的から「しずかをつかまえる」という行動目的に変化したことを表現する場面である。目的が変化したことでその体勢も変化し、両腕を上げた攻撃態勢になっている。この目的のために合理性のみで行動する無機質さが、機械が敵として迫ることの恐怖感を演出する工夫になっているといえる。

これらの4つの場面が鳥型の戦闘ロボットが登場する場面である。これらの場面に共通していたのは、鳥型の戦闘ロボット自体の行動に着目して描いているわけではなく、のび太たちの行動を描きその場面に存在していたものを描いているということである。そのため、この鳥型の戦闘ロボットは常にのび太たちの行動する日常の中に現れ、その日常を破壊する「敵」として描かれている。そこでこの「敵」としての恐怖感を強調するのがオノマトペの分析の部分でも述べた機械の特性である。その特性の中で特に用いられているのが、機械の「目的のためにのみ行動する」という性質である。人間とのコミュニケーションを一切とらず、ただ「人間を奴隷にする」という目的で行動することが、のび太たちがどのような状況にあるにもかかわらず襲い掛かる恐怖として描かれており、人間との違いであるといえる。

この人間と機械の違いを明確に描いているのが、しずかとリルルの会話の場面である。しずかがリルルの傷を治療する場面で二人は自分たちの考え方を話し合う。リルルは敵である自分を助けるしずかに対してなぜ自分を助けるのか、と問いかける。それに対するしずかの返答が「ときどきりくつにあわないことするのが人間なのよ。」というセリフである。このセリフがまさに機械と人間の考え方の違いを表現しており、リルルの行動が変化する要因の1つである。

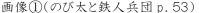
リルルの分析

ここからはリルルの行動や考え方の変化について、その描かれ方と同時に分析を行う。リルルの言動はその服装の変化とともに変化する。その段階は4つに分かれ、「鉄人兵団の服のとき」「地球に潜伏する際の人間の服を着ているとき」「傷ついた潜伏時の服、裸、包帯のとき」「しずかの服を着ているとき」である。

1つ目の「鉄人兵団の服のとき」はリルルのオノマトペの分析の画像①~③の場面である。無表情で通常ではありえない服装で北極を歩く様子が描かれている。任務を遂行するために機械の反応のみ関心を向けており、人間にとっては脅威であるホッキョクグマの襲来に対しても軽くあしらう程度の反応しか見せない。その後空を飛ぶ様子も描かれており、人間の姿であるが人間には不可能な行動をとる謎の少女として登場する。

2 つ目の「地球に潜伏する際の人間の服を着ているとき」は、リルルがスパイとしての活動を行う際に地球の人々に溶け込むように人間の服を着ながら諜報活動を行う場面である。







画像②(のび太と鉄人兵団 p. 58)

画像①、画像②はともに鉄人兵団が地球に送り込んだ巨大ロボットのありかを知るために聞き込みを行いいろいろな場所に行く場面である。これらの場面においてリルルは任務を遂行するために必要な巨大ロボットのありかを知ることを目的としており、その行動は他人の目を気にしないものであるため他人からは非常識であるという評価を受けている。画像①では初対面であるスネ夫とジャイアンに対して唐突に家ほどの大きさの巨大ロボットを見かけたかという問いを投げかけ、スネ夫の返答に対しても冷たい反応を示す。スネ夫は自分の自慢のロボットがおもちゃ扱いされたことに腹を立てリルルに対して怒鳴るが、それに対しても無関心である。自分の目的にのみ執着しており他者の反応を気にしていないことがわかる。

画像②はのび太の家の庭に無断で入り、失礼な発言をして飛び去る場面である。リルルにとって巨大ロボットを置くことができるかということ以外は知る必要がないため、巨大ロボットの有無、存在の確認をしてすぐにその場を去っていく。あくまで自分の目的を達成するためだけに行動していることがわかり、鳥型の戦闘ロボットの行動からも読み取れた機械の性質があらわれている場面であるといえる。



画像③(のび太と鉄人兵団 p. 87)

画像③は、リルルが鉄人兵団の地球侵略のための手助けを地球人ののび太に要請する場面である。 のび太を気に入ったという発言から鳥型の戦闘ロボットとは異なり自身で考えて行動していることはわかる が、最も優先しているのは自分たちの目的を達成することであり、地球人であるのび太の感情を考慮しない画像のようなセリフを発している。

これらのことから、この服を着ている場面のリルルは鉄人兵団のスパイであり、地球侵略の足掛かりとなる基地の建設という目的を最優先として行動する、人間のふりをするロボットという描かれ方がなされていることがわかった。他者の心情を気にせず目的のために行動するといった点では鳥型の戦闘ロボットと違いはないが、リルルは自分で考えて行動するという違いがあるため、人間の見た目をしておりコミュニケーションをとることも可能であるがその根幹に機械の性質を持つというギャップのあるキャラクターとして描かれている。

3 つ目の「傷ついた潜伏時の服、包帯のとき」は、ドラえもんのひみつ道具を乱暴に扱ってけがをした リルルを描く場面である。



画像①(のび太と鉄人兵団 p. 121)

画像①は、自分がロボットであることがしずかに知られた場面である。必死の形相をしており、しずかに 引きずられても足をつかむ手を離さずにいることからこれ以前の場面にはないほどその感情を表しているこ とがわかる。スパイとしての活動を行うために人間にその正体が知られることは不都合であるという理由で はあるが、基本的に無表情で描かれるリルルの大きな感情が読み取れる、機械にはない人間の性質が あらわれた部分であるといえる。



■画像②(のび太と鉄人兵団 p. 131)

画像②は、けがの手当てをしてもらっているリルルがしずかと話す場面である。リルルの機械としての思考が言葉にして直接表されている場面であり、人間であるしずかとの違いが明確に描かれている場面である。敵である自分を助けようとするしずかに対して疑問を抱き、「死」という概念を「壊れる」と認識していることから、機械の合理的な思考、命を持つ人間とあくまでも物体である機械との違いがセリフとして表現されている。思いやりを持ってリルルに接するしずかとの対比を描くことでリルルの機械としての一面が強く表れている場面であるといえる。



画像③(のび太と鉄人兵団 p. 138)



画像④(のび太と鉄人兵団 p. 140)

画像③と画像④は鉄人兵団の目的を語るリルルとそれに対する考えをぶつけるしずかを描いた場面である。画像③ではリルルが自分たちの人間を奴隷にするという目的の根本にあるロボットが人間よりも優れているという考えを表に出している。その考え方を受けて発言するしずかとコミュニケーションをとっており、

リルルが与えられた命令で行動する存在でなく自分なりの考えがあって行動していることが読み取ることができる。

画像④では、ロボットが人間より優れている、という考えを持つリルルが信じる理想が人間の歴史と同じものであるという指摘をしたしずかに対して怒りの感情を見せる場面である。これまでの場面でリルルは任務以外のことには無関心であり、あまり表情を変えることのないキャラクターとして描かれている。そのため、画像③のしずかのように大きな感情を見せながら発言するということはなく、画像④のリルルはこれ以前の場面では描かれていなかった人間的な部分を読み取ることのできる新たな描き方がなされている。

画像①~④の「傷ついた潜伏時の服、包帯のとき」のリルルは、しずかとのかかわりを通して描かれている。しずかとのかかわりの中でリルルは任務のための行動以外の姿を見せている。「地球に潜伏する際の人間の服を着ているとき」のリルルに見られた目的のためだけに行動する機械の性質はみられず、自分の考えを持ち、怒りの感情を見せるといった人間のような一面があらわれている。

しかし同時に画像②の場面で見せるような自身がロボットであることを前提とした考え方も描かれており、ただ人間らしさを出すのではなく、人間とは全く異なる考え、倫理観のもとに動くキャラクターとして扱われている。鉄人兵団として任務を遂行することができなくなった状態であり、潜伏時の服を脱ぎ捨てた「ロボットの国で生まれたリルルという存在」という素の状態のリルルがここでは描かれているといえる。

最後の「しずかの服を着ているとき」は、リルルの傷が回復して包帯を巻く必要がなくなり、しずかの服を着て行動するようになった場面である。



●像①(のび太と鉄人兵団 p. 148)

画像①の場面では敵対関係にあるしずかが自分を助けることに対して困惑するリルルの様子が描かれている。合理的な考え方をすればしずかはリルルを助ける必要はないため、機械的な考え方をするリルルにとってしずかの行動は不可解なものであるといえる。実際リルルはしずかに対して「どうして敵を助けるの。」と質問しており、それに対するしずかの答えとして「ときどきりくつにあわないことするのが人間なのよ。」というセリフが描かれている。これまでリルルや鳥型の戦闘ロボットによって描かれてきた機械的思考に対

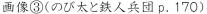
して、人間であるしずかから出された人間の心にリルルが触れる場面となっている。



画像②(のび太と鉄人兵団 p. 167, 168)

画像②は、しずかの家から抜け出したリルルをのび太が見つける場面である。のび太が発見したとき、リルルは階段で体育座りをしてじっとしている。鉄人兵団として任務が遂行できる状態にあるのにもかかわらず何もしないというこれまでに見られない行動をとっている。その後のび太との会話の中でのび太たちの策略を上司に報告しようとしていることを告げるリルルであるが、それを止めようとするのび太をあおるような発言をしている。祖国に尽くす義務があるといっているにもかかわらず、その行動をわざと止めさせようとしており、その言動に矛盾が生じているといえる。また、その表情もかなり変化が大きくなっており、体育座りでいるときは浮かない顔を、のび太を見つけたときは喜んだ顔、のび太に詰め寄るときは思いつめた顔を、司令部に向かうときには涙を流すというように、感情の起伏が大きく描かれていることがわかる。これらから、リルルはこの場面において目的のためだけに行動する機械的な思考ではなく、人間のように感情や自分の考えを基に行動していると考えられ、しずかとのかかわりがリルルの言動に変化を与えていることがわかる場面であるといえる。







画像④(のび太と鉄人兵団 p. 174)

画像③は、画像②の後にリルルが鉄人兵団の総司令の元に戻り会話をする場面である。鉄人兵団の総司令は以前のリルルと同様にロボット至上主義の考え方をしており、ここで画像②の場面でも読み取ることのできたリルルの変化が明確に描かれていることがわかる。自身の変化を自身でも把握しきれておらず、そのセリフも自身の考えを整理しながら吐き出したものや、心情をそのまま言葉にしたような困惑したまま話している様子が描かれている。ロボットとしての思考が変化した自分自身に理解が追い付かない場面であり、機械的な考え方でリルルと話す鉄人兵団の総司令との比較がなされた場面である。

画像④は画像③の後、反逆罪として捕まえられかけていたリルルをのび太たちが救い出し、しずかの家で会話する場面である。ここでは鉄人兵団の目的である地球人の奴隷化が悪いことであるとわかりながらも自分の祖国を裏切れないというリルルの中の葛藤が描かれており、リルルの中にもともとあった「ロボットのためのより良い未来を創る」という正義と、新たに自分の中に芽生えた人間側の考え方に揺れ動いていると考えられる。また画像③と同様、その心中をそのままのび太たちに話しており、常に不安そうな表情をしていることからも、その心の純粋さと不安定さが読み取ることのできる場面となっている。



■画像⑤(のび太と鉄人兵団 p. 197)

画像⑤は、鉄人兵団が地球を侵略するという出来事をなくすためにタイムマシンで過去に行き、ロボットの先祖を改造しに行く場面である。過去のロボットを改造することで鉄人兵団も消えるが、その際に自分自身も消えるにもかかわらず自らその計画を実行する。

画像④までは常に困惑したような表情を浮かべ、「どうすればいいのか、自分でも自分の心がわからないの。」というような発言をして何もすることのできなかったリルルが、自分自身の心が感じる正しいことを行い、その表情も決意を固めた晴れやかなものになっていることがわかる。ロボットとしての正義と人間の考え方の間で生まれた葛藤を、「ロボットと人間にとってより良い未来を創る」という理想に向かうことで解消する場面であるといえる。

画像①~⑤では、ロボットの国で生まれた自分の心と、地球人のしずかとのかかわりで芽生えた新たな心で葛藤するリルルの姿が描かれている。何をすべきかわからず座り込む、行かなければならない、と言いながら自分を止めるように促すなど、合理性とはかけ離れた行動をとっており、人間らしさを読み取ることができるようになっている。そこには「地球に潜伏する際の服を着ているとき」のような、機械が人間のふりをしているような不気味さ、ぎこちなさはなく、ロボットと人間のどちらの心も併せ持った存在として描かれている。

まとめ

これらの4つの状態がリルルの外見とともに内面の変化が描かれている場面である。リルルはその服装によってキャラクターが変化しており、「謎の少女」「鉄人兵団のスパイ」「ロボットのリルル」「ロボットと人間の心を持つリルル」というようになっている。

1 つ目と 2 つ目の状態のリルルは、他の感情を持たない鳥型戦闘ロボットのように目的のためにだけの行動をするキャラクターである。人間の見た目をしながら機械的な判断、思考で行動するため、その言動にはギャップが生まれており、その不気味さ、非常識さによって人間との違いを表現しており、鉄人兵団という「人間に敵対する機械」としてのび太たちにとって分かり合えない存在として描かれている。

3 つ目の状態のリルルは、鉄人兵団の服を脱ぎ、包帯だけの姿である。鉄人兵団の任務が遂行できない状態にあり、鉄人兵団のスパイとしてではなく機械の国メカトピアで生まれ育ったロボットの少女として描かれている。ロボットの国で育った倫理観、思考に基づいた判断をしており、その感情を表に出す場面もある。この状態のリルルはしずかとのかかわりの中でその様子が描かれており、人間の考え方をするしずかとの対比が行われている。常識、倫理観の異なる2人は分かり合うことはできず、リルルはしずかを襲い、

しずかもそんなリルルに対して「やはりロボットに人の気持ちが通じるわけないのよね…。」と独り言を漏らしその治療を中断しようとする描写もあることから、ここでも人間とロボットの間の壁が表現されているといえる。

4 つ目の状態のリルルは、しずかとの会話の後、人間の心に触れることで自分たちの倫理観、常識に対して疑念を抱き葛藤するキャラクターとなっている。けがが治り自由に行動ができるようになったリルルは、任務が遂行できる状態があるにもかかわらず鉄人兵団のスパイとしての行動をせず、何もせずに座り込むような合理的とはかけ離れた姿が描かれる。鉄人兵団の総司令との会話の場面ではこれまでのリルルのようなロボットの常識で話す総司令と人間の心を学んだリルルの考え方の対比が行われており、リルルの変化が強調されている。その後リルルは鉄人兵団の目的に従うのではなく、自分の信じた理想のために命がけでロボットと人間にとってのより良い未来を創るために行動する。

リルルは、人間の見た目でありながらロボットとして生まれ、ロボットの考え方や常識を持つというずれのあるキャラクターである。リルルはそのずれによって人間との違い、無機質さなどを感じさせる描かれ方をしており、人間とロボットが相いれない存在であることをほかのロボットと同様に表現している。しかし、リルルはその内面の変化によって人間とロボットが手を取り合いより良い世界を作ることが可能であることを証明する、人間とロボットをつなぐキャラクターであるといえる。

第三章 考察と今後の課題

第一節 考察

ここまでで本作品におけるロボットの描き方の分析を行ってきた。その結果から、リルルの変化がこの物語においてキーポイントとなっているということがわかった。そしてその変化はほかのロボットの不変によって効果的に描かれているといえる。

この物語においてその性質を変えるロボットはリルルのみである。外見においても内面においても、リルルのほかのロボットは変化することなくのび太たちの敵であり続けたり、ロボット至上主義の考えを曲げずに行動する。それに対してリルルはその服を変え、けがをし、自身のロボット至上主義の考えも変える。物語の中の言動だけではなく、そのオノマトペの描き方においてもリルル以外のロボットが一定のものであるのに対してリルルは状況の変化とともに変化する。

物語の序盤ではリルルも鉄人兵団のロボットとして行動しており、読者にとってロボットは「無機質で自分たちと常識の異なる敵」であるという認識を持つこととなる。リルルの変化はこの読者の認識を裏切るものであり、それゆえにリルルがもともとの鉄人兵団の理想ではなく、リルル自身が考える理想の世界のために命をなげうつ場面はこの物語の見せ場であり、魅力的な部分であるといえる。

本作品の魅力的な部分は、鉄人兵団をただの機械の軍団として描かなかったことであると私は考える。鳥型の戦闘ロボットのような無機質な敵だけではなく、鉄人兵団の総司令やリルルのようなロボットの心を持つキャラクターを描くことで、鉄人兵団を「心のない無機質な侵略者」とするのではなく、人間とそう変わらない心を持った、ロボットの国で暮らす者たちとして描いている。これによって「ロボットは人間が作ったのだから人間が使うべきだ」という人間の考えと「ロボットのほうが人間より優れているのだから人間を労働力にする」というロボットの考えの対立が描かれており、単純な「正義」と「悪」の戦いではないという気付きを読者に与えているといえる。

本作品が「のび太と鉄人兵団」というタイトルになっているのは、鉄人兵団がのび太たち人間と同じように自分たちの正義を持った存在として対立しているからであると考えられる。鉄人兵団がただの悪ではなくロボット側の正義を持つことでその対立に深みが生まれ、鉄人兵団の恐ろしさだけではなくその対立を乗り越えて心を通わせたしずかとリルルの関係やリルルの行動が物語において魅力的な要素となっているのである。

第二節 今後の課題

今回の研究では、一部の登場人物のオノマトペと要所の分析のみに終わってしまっているが、漫画を構成する要素はそれだけではなく、ページの区切り方やコマ割りなど、漫画ならではの表現方法の分析を行うことができなかった。物語の分析もロボットのキャラクターに焦点を当てて分析を行っているが、鏡面世界という本作品独自の設定や人間のキャラクターについての分析ができておらずかなり限定的な分析になってしまった。

また、本作品は漫画だけではなく、ノベライズ版、2種類の映画が存在する。原作とノベライズ版との違いや、新旧の映画でどのような違いがあるのか、といったほかの形態での本作品の分析も行っていきたい。

終章 おわりに

今回の研究にあたって、毎週ご指導してくださった野浪先生、そして中間発表でアドバイスをしてくださった多くの先生のおカ添えがありました。先生方の指導がなければこの論文を書き上げることはできなかったと思います。本当にありがとうございました。

野浪ゼミの活動では、先生の体験なさった話や、日本語の文法や表現の話など非常に興味深い話 を聞くことができ、自分にとって本当にいい経験になったと思っています。野浪ゼミで話す時間は非常に 濃密で、楽しく、有意義な時間でした。最後の野浪ゼミの一員となれたことを誇りに思います。

自分を成長させてくれた野浪ゼミには感謝しかありません。4 月からはこの経験を糧に新たな場所でキャリアをスタートさせたいと思います。4 年間、本当にありがとうございました。

参考文献

藤子·F·不二雄「大長編ドラえもん のび太と鉄人兵団」(小学館 1987年2月25日 発行)